The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グアテマラ北西部の文化とシステムのダイナミクス
Author(s)	小泉, 潤二
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1999, 25, p. 101-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グアテマラ北西部の文化とシステムのダイナミクス

小　泉　潤　二

目　次

序
1．政治暴力と和平合意
2．教育
3．開発援助
4．市場経済と自由貿易
5．生産パターン
6．宗教
7．移民
8．観光

グアテマラ北西部の文化とシステムのダイナミクス

小泉　潤二

序

現在中米グアテマラで実施中の調査についての中間報告をしたい。この調査は、文部省科学研究費補助金による国際学術研究「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究」[1]の一環として行っている。私自身が約20年前の1978年から1979年にかけて集中的に調査した地域[2]の農村と都市について、「文化とシステム」の連関を分析することが主題である。

人類学では過去の一時点に調査された地域について、同一の、また別個の人類学者が再調査を行うことが多い。この傾向は米国人類学者のフィールドとしての中南米についてとくに著しく[3]、再調査に基づく「文化の変化」「社会の変化」「変化と継続性」「グアテマラの町の30年」などについての報告が数多く出版されている。

これまで「定点観測」をしてきた場を私が訪れようとするにあたって、単なる「特定文化」についての「再調査」はしたくなかった。文化を文化研究だけに限って、文化を文化に還元して説明することは避けたいと考えた。文化が接触して文化変容という化学変化を起こすという20世紀半ばからのパラダイムや、グローバリゼーションと人的移動の中で文化の混淆や雑種化が進むという近年流行のアプローチは取りたくなかった。そこで試みたのが「文化とシステムのダイナミクス」という概念によって、文化の動態を文化の「外側」のシステムにつなげながら、しかしその「外側」により決定されるものとすることは避けるというやり方である。

「文化とシステム」を対比して捉えるアプローチは、クリフォード・ギアツが「儀礼と社会変化」と題する論文（Geertz 1973）でP・ソローキンを用いながら示した二分法に由来する。そこで論じられたのは、「論理＝意味的統合(logico-meaningful integration)」と「因果＝機能的統合（causal-functional integration)」という、２種類の統合の間の対照と齟齬である。前者の「論理＝意味的統合」は、様式や論理的意味の統合、価値の統合を指し、後にギアツが「文化」あるいは「文化体系」と呼ぶようになった種類の意味連関を指す。後者の「因果＝機能的統合」は、有機体的な統合、行為の総体としての社会がシステムとして示す構造的な統合を指す。別の言い方をすれば、二種の統合の間の対比は〈ある意味での〉文化と〈ある意味での〉社会との対比である。この両者がインドネシアの一農村で矛盾と不調和を起こすさまを、一人の死者を弔う過程で動きのとれ

なくなった葬礼の事例を通じて明らかにしようとしたのが「儀礼と社会変化」だった。

私は、機能主義的色彩の強い「統合」という概念よりは、曖昧で多義的な「システム」という概念を故意に用い、そこに経済システムや政治システムや国家システムや民族システム……など、およそシステミックに構造化しながら機能する社会的現実を何でも含めようとした。もとより「システム」という概念は「文化」の概念に劣らず不明瞭である。それをさらに多義的とした上でもう一つの曖昧な概念としての「文化」と掛け合わせれば、議論はますます拡散的となることは初めからわかっていた。しかし、ともに不明瞭な2つの「言葉」をあえて分析の（仮の）道具として用いることによって、文化を特定システムに還元して理解するような文化分析、つまり文化を資本主義システムや国家システムや（新）植民地主義システム等により規定されるものとして捉えるような還元論を避け、より社会的現実に密着した文化分析の可能性を探ることができるのではないかと考えた[4]。システムという概念は、システムによる決定論を提出するためではなく、還元論の誘導に対して備えるためである。

*　　*　　*

このような理論的関心をもって見たときの現代の中米は、文化の変化について、とりわけ文化の変化の欠如という問題について重要な示唆を与えている。

最初にグアテマラを訪問した1976年から2年ほどを経て、1978年2月から1979年6月にかけて私は集中的な民族誌的調査を行った。その後20年近くを隔てた今回の現地調査は1997年11月～12月と1998年8月～9月に実施し、1998年11月～12月また1999年にも再度実施する予定である。本調査は現在進行中であり、依頼した資料収集には中途段階のものもある。これまでに集めた資料の整理と分析も完了しておらず、調査が進むにつれ不十分さが明らかになる点も多い。にもかかわらず本稿では現時点で一応の整理を行い、既に明らかになった事実関係及び重要と思われる問題について述べておきたい。

調査の焦点は、グアテマラ北西部ウエウエテナンゴ（Huehuetenango）県の、ウエウエテナンゴ市北西に位置するS共同体である。この共同体つまりムニシピオは、広義のマヤ語の一つであるマム語を話す先住民（インディヘナ、インディオ）[5]がつくる村落からなっている。1970年代後半の私の調査は、この農村に住み込んで周囲の農村とその中央のウエウエテナンゴ市をながめるというかたちをとった。1990年代後半の今回の調査では、主にウエウエテナンゴ市に住んで他の多数の共同体を訪れながら、そのさ中にS共同体を位置づけるというかたちをとっている。

この20年間に、S共同体ではさまざまな次元で変化が起こった。人口は以前の1万人からおそらく1万5千ほどに増大し、共同体の中心部には家屋や施設が増えて密集状態となった。森林の枯渇は進行し、植林をしても当分は追いつかない。もともと少なかったラディーノ（非先住民）の人口は、家族ぐるみの移住によりさらに減少した。共同体

の先住民メンバーのユニフォームとしての手織の衣装[6]にはとくに女性について色彩の変化が生じ、赤で覆われる部分が増大して白地の部分がほとんどなくなるとともに、若い世代では全体に青みがかった色調が目立つようになった。家屋は若干大きくなり部屋数が増え、土間に直接石を置いてそこに土器をのせていた炉はラディーノ式のかまどやプロパンガスに取って代わられた。経済は一定程度の発展を遂げ、パートタイムの商人の数が増えた。パンアメリカン・ハイウェイとS共同体とを結んで商業活動を支える道路は、依然として河床のように未整備な箇所や定期的な土砂崩れがふさぐ部分は残るものの、中型四輪駆動トラックを所有する村民が増えて、ひっきりなしとは言えないまでも相当の交通量となった。20年前に車を持つ者は、ラディーノ1名、先住民3名だけであり、それが早朝と夕刻に村を出入りするだけだったのである。

しかしこうした文化変化と社会変化は、一見して見て取れる表面的なものばかりであり、それほどの重要性を持たないものが多い。重大な変動は奥深いところで、視覚の及ばないところで複雑に確実に進行している。そしてその進行を理解するには〈システム〉に対する注意が欠かせない。

〈システム〉との関連で捉えるべき要素は数多くある。以下に取り上げて概略を述べておく。

1．政治暴力と和平合意

グアテマラの過去20年の歴史を語るとき、誰もがまず第一に口にするのは政治動乱つまりビオレンシア（violencia「暴力」）である。1960年代初頭のゲリラ蜂起に始まり36年ほどの間に十万とも十数万とも言われる犠牲者を出した内戦は、無数の負傷者や難民を生み正確なところはわからないほどの数の村を焼き尽くした。国連主導の和平合意が左翼ゲリラ組織URNGとグアテマラ政府の間でようやく成立したのは、東西世界の対立構図が解消して数年の後の1996年12月29日である[7]。

軍事対立が頂点に達した1981年から83年にかけては、S共同体でも十数名の犠牲者が出た。しかし理由は明らかではないが、S共同体が受けた影響は周辺の共同体に比較すれば大きくはなかった。人々は日が暮れてゲリラと政府軍の戦闘が始まると恐れおののきながら自分の家に潜み、嵐の過ぎ去るのをじっと待ったという。

和平合意により先住民インディヘナの権利が確認されたことは当然大きな意味を持った。ワレン（Warren 1998）が詳細に報告するような汎マヤ主義、つまり先住民マヤ全体としてのアイデンティティを文化的に追求しようとする政治運動は、グアテマラ中西部で活発に展開されているがウエウエテナンゴ県では勢いがない。それでも先住民が先住民の衣装を着けて活動する社会的な場は拡大した。共同体外に出るときは非先住民ラディーノの洋服で「装う」のが常だったS共同体の人々も、現在ではどこに行くにも先住民のユニフォームである。

2．教　育

和平協定の締結後に二言語教育が進展をみていることは、さらに意味が大きい。小学校ではスペイン語での授業に加えて、二言語つまりスペイン語とマヤ語を併用して行われる授業が増加した。「マヤ語」と呼ばれる先住民言語は、ウエウエテナンゴ県だけをみてもマム語、アワテコ語、ハカルテコ語、カンホバル語、チュフ語、アカテコ語などに分かれており、それぞれ相互に理解不能であるとされている。しかしそれぞれの地域言語に合わせた教科書が作られ、現地語をアルファベットで読み書きすることをまず学習した子供たちが、その知識に基づいてスペイン語を学習するプログラムになっている。

S共同体の場合、現地語はマム語である。共同体内のラディーノの数がゼロに近づいた現状では、教育のほとんどは二言語で行われている。生徒の出席率は高まり、建物設備の不足が言われるようになった。小学校6年の卒業生が6人しかいなかった1979年の状況とは大きく異なるように思われた。

しかし現在でも卒業生数が10数人に過ぎないという報告は意外だった。出席率が高まり学校に溢れたのは低学年のみであり、一通りのスペイン語を学習した後の高学年になると登校しなくなる。自然・社会・算数・言語という教育体系の4本柱の中で、人々の要求を満たすのは最後の1本だけだとみなされている。

それでも教育システムは、共同体内エリート養成への道筋をつけた。1970年代後半には先住民で小学校教師の資格を持つ者はただ一人であり、その他の教員はすべて都市部から派遣されるラディーノだった。現在では高卒で教員免状を得た先住民が十数名になった。S共同体外出身の教師も何人かいるが、多くは共同体内の人々である。そしてマヤ語の知識を持つ二言語教員の方が単言語教員より就職については有利だから、教員資格は以前にはなかった雇用機会を意味している。

3．開発援助

教育分野などについての国外からの援助は、和平合意を期に一気に拡大している。正確な数字については調査中であるが[8]、日本などの援助国家や国連などの国際機関、またNGOや宗教団体から送り込まれる資金と人員には膨大なものがある。MIで始まるナンバープレートの国外使節団の車が、人口8万のウエウエテナンゴ市を走り回る。市の中央市場の近くに国連事務所が設置され、唯一の近代ビルには国連開発計画（UNDP）の事務所が入った。市のあちこちに、家族計画や女性のための組織が事務所を構えるようになった。

町を出れば、道路や橋梁や学校などの建設プロジェクトの進行や完了を示す看板が、現政府の宣伝と揶揄されながらも至る所に立っている。村では保健所や電話の設置プロ

ジェクトの表示が目立つ。S共同体にも、学校や市場や保健所や道路が新しくできた。町も村も、開発の意欲に沸いているように見える。

しかしそれがエスニックな緊張を高めている面がある。アファーマティヴ・アクションとして行われる開発援助は、過去の歴史において不利な状況に置かれてきた先住民に限定して行われることが多い。先住民の少ない地域では、たとえ悲惨な生活状況が際立つ場合でも、援助が振り向けられることがないという話を先住民の側の教育者から聞いた。

こうしたことに対し、非先住民ラディーノは複雑で強い感情を抱いている。鏡に映った似姿のように「自分」と「自分でないもの」を先住民と非先住民の対照性の中につくり出すグアテマラのエスニシティ構造[9]においては、一方のみに注ぎ込む経済的利益と社会的恩恵は、過去の歴史に対する社会としての償いであると同時に、現在の文化的対立関係に影響し得る要因でもある。

4．市場経済と自由貿易

国際援助による変化を別にすればウエウエテナンゴの経済は未発展であり、唯一の製粉工場を除いて市内に産業と呼べるものはない。しかし市場活動一般については、ウエウエテナンゴ市でもS共同体でも活発化した。都市部では無数の小商人が、市場の空隙を求めて特定商品に特化するというパターンが進行した。数本の缶コーラ、両手に握った腕時計の束、背負えるだけの箒、路上に広げられるだけの歯磨きなど、隣の商人とはかろうじて重なることのない種類のわずかばかりの商品を、なんとか通りすがりの人々に売りつけて生計を立てようとする人々が街路に群をなすようになった。一方S共同体においては、市場規模の量的拡大が明らかである。以前は屋外広場で開かれていた定期市は、新設の屋内市場に移動しておよそ4倍に広がり、規模の拡大に見合うだけ取引量も増大した。ただ、糸、小間物、生活雑貨など、売買される商品はあまり変わっていない。

自由経済、というより新自由経済の影響は、S共同体については感じられない。たとえばメキシコのミチョアカン州の農村部のように、北米自由貿易協定（NAFTA）の発足後に小麦価格が暴落し、代替の生産物を求めて暗中模索する姿はみられない。これはS共同体の生産が自給作物に集中し、換金作物の重要性がこれまでは低かったことによる。

世界的な規模での自由貿易システムの進展が、ウエウエテナンゴ県に影響を与えていないわけではない。例えばウエウエテナンゴ市東方のA共同体は、これまでニンニクとタマネギの生産に圧倒的に依存してきた。しかしメキシコ産のタマネギと台湾産のニンニクの輸入が増大したため価格が大きく下がり、従来の農業パターンの継続性自体が脅かされている。NAFTAの影響がまずメキシコに及び、それが南のグアテマラにも及んでくるという漠然とした危惧もある。「メキシコ帝国主義」という言葉も聞いた。実際メキシコとグアテマラの間の輸出入バランスはまったく不均衡であり、この不均衡が

さらに進行することが予想されている[10)]。

5．生産パターン

自給生産に依存し食料自給がほぼ可能なS共同体でも、過去20年に換金作物生産が拡大し、その結果共同体経済が世界市場と直接関わり合うことになった。それまで生産においては孤立的だった地域経済を、グローバルなシステムへ直接に、そして一気に結びつけたのはコーヒーである。

コーヒーの収穫は熱帯性気候と火山性土壌と海抜高度によって規定される。1970年代後半のS共同体におけるコーヒー栽培は、共同体内で海抜高度の低い、谷川沿いのごく一部地域に限られていた。現在ではここを中心に栽培地が広がり、海抜高度1900m付近の土地はみなコーヒーに振り向けられる傾向にある。

しかしより重要な変化は、共同体外のコーヒー栽培地の取得が進んだことである。共同体外に土地を所有するというパターンはウエウエテナンゴ県ではあまりみられず、S共同体についてはとくにみられなかった。ウルフ（Wolf 1957）が言うような、特定共同体の土地所有は共同体成員だけに限られるという定式化は極端であるにしても、S共同体についてはそれに近い実状だった。

そうした中で、県西方メキシコ国境に近いD共同体は興味深い事例を提供している。20世紀初めに創設されたこの共同体では、県南部の複数共同体から集まった先住民やラディーノが、それぞれの出身共同体やエスニック集団の意識を保持しながら単一共同体を構成している。

このD共同体にS共同体の人々が土地を取得し始めたのは1980年代になってからである。D共同体は急傾斜の山岳地帯にあるが、S共同体よりはるかに暖地にありコーヒー生産の好適地である。ここに土地を購入したS共同体の人々は寄り添って居住し、一種のコロニーを作っている。収穫したコーヒーはウエウエテナンゴ市のはずれに林立するコーヒー輸出業者に直接売却されている。別の言い方をすれば、以前は大規模農場の季節労働者として働いていた人々が、極小規模の農場の所有者となり、世界経済の周辺に参加し始めたのである。同時に、きわめて不安定で変動し続ける商品市況に決定的に左右されるようになった。

コーヒーに加えて、地域によっては非合法の換金作物の生産が始まった。アマポラ（ケシ）など麻薬類は、コーヒーよりはるかに収益性が高い。生産ばかりでなく中継も行うインフォーマル・エコノミーの展開の結果、ウエウエテナンゴ市には多数の銀行が新規に開設され、その数は「プロテスタントの教会より多い」という冗談を生むようになった。

6．宗　教

「プロテスタントの教会より」という表現は、ウエウエテナンゴにおける教会数の爆発的増加を背景にしている。

グアテマラはラテンアメリカで最もプロテスタント化が進んだ国である[11]。そしてウエウエテナンゴ県でプロテスタント比率の最も高い共同体の一つがS共同体である。

1970年代後半にS共同体の宗教構成について私が計算したところ、(1)先住民のマヤ宗教と中世カトリシズムが習合した「民俗カトリック」の比率が約4分の3、(2)民俗カトリックの異教儀礼に批判的な正統的カトリックが1割強、(3)さまざまな宗派に属する福音主義的プロテスタントが合計約1割だった。現在は民俗カトリックの数は1割を割り込んだ可能性があり、プロテスタントが共同体成員の過半数を占めている。20世紀半ばに導入されたプロテスタンティズムが、なぜこのように急速な発展を遂げたかは容易に説明できない。要因としては、(1)国外から訪れる宣教師たちのきわめて活発な活動、(2)グアテマラではプロテスタンティズムが近代化の過程と結びついてきたこと、(3)民俗カトリシズムの中枢に位置する伝統的「罪」(il) 概念の強力さと、それがもたらす（とされる）深刻な災いから改宗により逃れようとする欲求（Koizumi 1981, 小泉 1990)、(4)民俗カトリシズムの儀礼では飲酒が中心できわめて大きな出費を伴うことに対する嫌悪感（小泉 1987)、(5)政治と社会の情勢が最も不安定な時期のグアテマラ大統領がプロテスタントであり、安全を求めようとする人々が権力の側にすり寄ったことなどが、一応の（しかしどれも部分的な）答えとして考えられる。

これらに加えて経済行動パターンにおける変化を、改宗に「相関するもの」として捉えるべきである。経済行動の変化は宗教変化をもたらし、また宗教変化によってもたらされている。このことを示すのは、「政治＝宗教的ヒエラルキー」や「カルゴ体系」の名で呼ばれてきた役職のシステムの変容である。

S共同体では役職がスラル（slal）と呼ばれることから、私はこの制度を「スラル体系」と呼んできた（小泉 1987)。民俗カトリシズムの中核をなす制度として、1970年代のスラル体系は精緻な数学的構造をもって機能していた。S共同体の全成人男性が140の役職に1年交代で就くことによって、共同体の維持に不可欠な世俗的機能が果たされるとともに、共同体の守護聖人たちに対する儀礼義務が遂行されていた。この制度ではどの役職にも経済的負担が伴い、巨大な負担が成員間を巡回して定期的に経済的また心理的な苦痛を与えていた。

このスラル体系は1990年代までに大きく変貌した。何よりマム語でマルトン（marton、スペイン語でマヨールドモ mayordomo）と呼ばれる役職が廃止され、「政治＝宗教的」な二つのヒエラルキーのうちの宗教部分が消滅した。これは正統的カトリックと福音主義的プロテスタントの双方が、守護聖人に対する民俗カトリシズムの儀礼を攻撃し排斥したことによる。また、宗教的役職に付帯する極端な儀礼的出費がそもそも強い嫌悪の

対象だったことにもよる（小泉 1987)。廃止された宗教的役職を再興しようとする動きもあった。しかし忌むべき重荷から一旦逃れた後は、また民俗カトリシズムの儀礼を行う者がそもそも少数派となった後は、あえてその重荷を担おうとする者はなく、結局スラル体系の宗教部分が回復されることはなかった。この体系は、行政的・政治的部分のみからなる世俗的システムに変質したのである。

中米の多くの共同体では、カルゴ・システムの世俗的部分が消滅して宗教的部分だけが存続することが多い。しかしS共同体の場合は逆だった。強烈な共同体性を維持するS共同体にとって、共同体の機能に不可欠な世俗的役職だけは存続したということかもしれない。

7．移　民

宗教的役職の廃止に加えて世俗的役職に伴う経済負担の軽減があり、こうして消費を強制する儀礼システムの力は弱まり富の蓄積が進んだ。しかしS共同体が20年の間に相対的に豊かになったのは、消費ばかりでなく所得の側の変化にもよる。

先に見たコーヒー生産の開始に加えて、新たな雇用が収入源となった。共同体内にとどまりながら得られる雇用としては高校に進学して教員になるのがほとんど唯一であるが、共同体を一時的に離れるならば他にもわずかながら可能性がある。数人の若者は首都グアテマラ市で警官の職を得たし、ウエウエテナンゴ市に完成した高級観光ホテルでウェイターとなり、求めに応じて先住民衣装を着けて観光需要を満たしながら働く者も何人かいる。

定職ではなく一時的な雇用ならば従来からあった。太平洋岸に近い中低地のコーヒー・プランテーションで、コーヒー豆の収穫期に未熟練季節労働者として働くことがS共同体の人々にとって最大の現金収入源だった。1970年代後半には季節的集団移民に近いかたちで、家族ぐるみでプランテーションに移動する人々がトラックの荷台に溢れていた。

この労働パターンは大きく変化した。南方の太平洋岸に向かう人の数は減少し、西方メキシコ国境のプランテーションに向かう人が増加した。この原因については調査中であるが、ともかく南方での雇用が減ったこと、西方に小規模なプランテーションが増えたことははっきりしている。太平洋側のコーヒー・プランテーション自体が、牛肉生産やサトウキビ生産やゴム生産 —— つまり、収穫期に手摘みを必要とするコーヒーに比べて労働力を要しない産業 —— に転用されたため、雇用が減ったという情報がある。もしこれが事実とすれば重要な構造変化が起こっていることになる。従来のプランテーションが牧場に転用され労働需要が減少していることは、中央アメリカ全般について報告されていることである（DeWalt 1986)。しかしあるプランテーション所有者に尋ねたところ、そのような変化は否定された。また労働者の側から、以前は夜明けから日暮れま

で仕事があったが今は昼までしか働けず十分な賃金が得られないという情報もあった。これについては雇用者の側から、新労働法の制定により合法的な労働時間が制限されたためだという説明がある。

理由は何であれ、人の流れに変化が起きていることは確かである。以前の流れは南方に数百キロ隔てた大規模プランテーションとの間で、南北方向の回転運動として起こっていた。現在はこの方向の流れが弱まり、西方に数十キロ隔てた小規模プランテーションとの間で東西方向の回転運動が起こっている。

回転により現金収入が得られるというのはむしろ文化的な概念化である。南にせよ西にせよ、人々は「労働する」よりは「移動する」こと自体により富を得る。収入は移動と結びついている。

現金獲得活動をこうした文化概念としてみたときに、移動自体が帯びる重要性はプランテーション＝共同体間に限らない。先住民マヤの商人たちが、毎週異なった曜日に近隣共同体の定期市を巡り続け、わずかばかりの収益を積み重ねていく様態も同じである。月曜はB共同体、火曜はC共同体、水曜はウエウエテナンゴ市、木曜はS共同体、というように、人々は定点に店を開くよりは巡回市のリズムに合わせて移動を続け、この移動のプロセスの中で富を得るのである。ある男が言ったように、彼らは「1センタボを求めて」、つまり現在のレートで¼円を求めてどこへでも動く。

巡回市を追い求める移動は1週間周期であり、プランテーション労働のための移動は1年周期である。これより周期が長く移動の距離も大きい新たな現金獲得のパターンが出現し、急速に広がりつつある。米国への非合法労働移民である。

ウエウエテナンゴ県を全体としてみれば、農村共同体から首都グアテマラ市への国内移民も多い。しかしS共同体の場合グアテマラ市へ向かう者は皆無に近く、逆に首都の反対方向、国境のかなたのアメリカを目指す。そして非合法の国境通過は大きな困難とコストを伴うから、人的移動の周期は数年単位になる。このような移動を行うのはほとんどが若い男性であるが、既に米国移民の経験者の数は優に3桁を数えている。S共同体の外を見れば、米国移民の数ははるかに多い。世界経済システムの中央での労働参加は拡大し続けている。

米国経験者に話を聞けば、移動を試みる理由はあまりにも明らかである。労働の種類――農業労働、レストラン、鶏肉工場、建設労働など――にもよるが、S共同体からの移民の一人は週休420ドルを得ていたという。これは年収に換算して約2万ドルにあたる。もしグアテマラ国内のプランテーションで働いたとすれば日給3ドル程度だから、仮に365日すべて働くことができたとしても年収千ドルほどであり、米国の場合の20分の1である。別の比較をすれば、グアテマラの学校教員の年収は2千ドル程度だから、米国移民の場合の10分の1にあたる。

このように巨大な賃金格差についての情報が広がっている以上、米国からの吸引力はすさまじい。非合法移民を補助する非合法の仲介者としてのコヨーテ（coyote）はもっ

ぱらウエウエテナンゴ市に集中しているが、彼らの請求額は需要を背景に高騰している。4年ほど前には7千ケツァルほどだったというが、1997年12月の調査時には1万3千ケツァル、1998年8月には1万6千ケツァル（つまり2700ドル）に上昇していた。米国への片道航空運賃と比較してもたいへんな額である。

移民たちはコンテナ・トラックなどに潜んで移動する。グアテマラからメキシコへはウエウエテナンゴ県の辺境に通路があるが、メキシコから合衆国へ「トルティーヤのカーテン」を通過する際には歩いて砂漠を越え泳いで川を渡り、そこで死者が出ることがしばしば報道されている。S共同体の場合犠牲者はまだ報告されていないが、移民局により逮捕され強制送還されて先払いした費用を失った者がある。テキサス州のヒューストン市にたどり着く前に逮捕された場合は費用の残額は戻るものとされるが、ヒューストン到着時点でコヨーテの仲介は成功裏に完了したものとみなされる。その後S共同体の人々は米国の東部や西部や南部に移動して労働に従事するが、とくにフロリダ州のH市にはS共同体の拠点と言うべきものが作られ、約50人が共同で生活しているという。

このような移民という行為は投資であり、企業家（entrepreneur）の活動と呼んでよい。

¼円を求めてどこまでも動く人々にとって、2700ドルつまり30万円以上がどれほどの金額であるかは容易に想像できる。この出費は長年の重労働と営々とした貯蓄によって、また土地などの資産の売却によって、あるいは高利の巨額の借り入れによってまかなわれる。そして失敗すればまさにすべてが失われ、命が失われる可能性もあることを知った上で投資する。しかしこれまでこの企業家精神は成功をもたらすことが多かった。リスクはあるにしても、2700ドルを、そして自己という存在をそのまま資本として投下すれば、1年で2万ドル、数年で数万ドルとなって戻ってくる。

こうして数倍数十倍に膨らんだ資金を得てS共同体に帰り先住民衣装に戻った元移民たちは、その資金を土地や車や商品の購入にあてる。これは私が知るメキシコのミチョアカン州からの米国移民の場合とは際立った対照をなしている。メキシコの場合、同じように国境を越え大きな富を得ることに成功した人々は、戻って家を建て、乗用車を買い、家具を揃え、衛星放送のための巨大なパラボラアンテナを立てている。S共同体の人々がアメリカから戻れば、共同体内外のコーヒー農地を取得し、運輸業を自営するための四輪駆動のトラックを買い、巡回市で売るための商品を購入する。一言で言えば、メキシコのパターンは消費志向的、S共同体のパターンは投資志向的である。後者では生活様式には重要な変化が起こらず、ただ富が富を生んでいる。

20年ほど前、S共同体の元村長の老人から、プワカ・ウィッツ（pwaq witz）、つまり「現金の山」「宝の丘」の話を聞いたことがある。他の何人もから同じ話を聞いた。周囲の山中のどこかに「現金の山」があるという。この山の主人は、人の命を奪うことによって生きる危険な超自然的存在、タアウ・ウィッツ（ta7w witz「山の主」）である。しかし山の内側に入りさえすれば現金がいくらでも手に入る。地界への入り口はどこかの岩か洞穴で、たまたまそれを見つけた人にしか場所がわからない。それにその山の内

側に入るには、ほとんど誰も知らないような儀礼を行い、誰もが耐えることのできないほどの禁欲を経た上でなければならない。そんな山を探す人は大抵は儀礼に失敗して命を落とす。しかし首尾よく巨万の富を得て戻った者も実際にある。

話し終えるとこの老人は、虚ろな目で一人ぼんやりと宙をながめながら、「アトゥルタア…」(atl ta7) とそっと呟いた。「あるんだろうなあ…」の意味である。山はおそらく現実に存在する。ただその場所がわからない。民話収集のつもりでメモを取っていた私には、この合理的で政治力に長けた老人が、日々の生活苦を込めて漏らしたこの一言が忘れられなかった。

この元村長の若い息子が昨年米国から戻った。今は孫の一人が滞米中である。

富と危険が隣合う「現金の山」は遂に見出されたのかもしれない。入り口への道案内としてのコヨーテの存在も、そこへ入るために必要とされる高額の儀礼も、今では周知のものとなった。

8. 観　光

国家としてのグアテマラに観光がもたらす利益は巨大である。モノカルチュアで知られるグアテマラにとって最も重要な輸出品目はコーヒーであり、その生産は年額5億8850万ドルにのぼるが[12]、それに次ぐのが観光産業である。観光がもたらす歳入は3億2520万ドルに達し、その後に砂糖（2億5530万ドル)、バナナ（1億5030万ドル)、カルダモン（3790万ドル）と続く[13]。まさにグアテマラを支えるのは観光であるが、それを支えるのは先住民マヤであり、それも民族衣装をつくり民族衣装をつける時のマヤが支えるのである。

首都グアテマラ市のアウロラ国際空港のすぐ近くには、国外からの観光客が必ず訪れる民芸品市場[14]と国立考古学民族学博物館[15]がある。古代マヤとその現代の末裔の幻影を求めて全世界から集まる観光客は、古代マヤの石彫 ── 考古学 ── と現代マヤの民族衣装 ── 民族学 ── という二部構成の博物館の中で、古代と現代の連続性と一体性を確認する。そして民芸品市場で現代マヤの極彩色の織物や工芸品を手に入れ、グアテマラ国内に散在する古代と現代とその間をつなぐ植民地時代の観光地を訪問する。

S共同体の人々のユニフォームとしての民族衣装は、アウロラの民芸品市場で売られるようになった。それより重要なことは、考古学民族学博物館に陳列されるようになった。S共同体の衣装はマネキンに着せられ、手編みの帽子はガラス・ケースに収められ、正面の大壁画にはS共同体の男性が、持つはずもない儀礼用具を持って立ちはだかる。

グアテマラの観光ガイドブックやパンフレットの表紙を飾るのはほとんどいつでも先住民の少女であり、華麗な民族衣装で誘うかのように微笑みかける。マヤは招く。動乱の時代は遠い。こうした観光ガイドや絵葉書や写真集に、S共同体の人々も頻繁に登場するようになった。絵はがきやマネキンや壁画やガラスケースに固定された彼らのアイ

デンティティは、世界観光システムの中で商品となり、観光されるものとなった。

しかしこれは人々のアイデンティティが商品となったということであり、人々自身が商品となったということとは違う。

考古学民族学博物館で、S共同体の人々の固定され不動化された衣装姿をいくつも見た後、博物館を出たところの遊歩道ですれ違ったのはS共同体の一家族だった。あたかも壁の中、ガラスの中から抜け出た人々のように見えた。父親と母親と兄弟と子供たちが、手をつないで空港周辺を散歩しているところだった。おそらくは見覚えのある私を、村からはるかに離れた予期しない所で見て、小さな女の子はいつまでも後ろを振り返っていた。

以前のS共同体の人々は、共同体外に出ること自体が希で、出るときも大抵は経済目的で民族衣装をつけることはほとんどなかった。しかし現在の彼らはグアテマラ市をはじめとする各地を、自分がS共同体の人であることを衣装により示しながら、とくに目的はなくただ訪れるために訪れている。空港で散歩するあの家族は観光をしていたようである。彼らが観光する者なのか、それとも観光される者なのかはわかりにくくなった。

*　　*　　*

以上に見たことは、深層において変化しつつある〈システム〉と、表層においてさして変化しないかに見える〈文化〉との相関として捉えるべきかもしれない。歴史の中で、S共同体の文化は様々な側面で変化してきたが、そのことよりはむしろ、変化しない、少なくとも変化しないように見える側面が多いことに注目する必要がある。20年の時を経て、動乱の80年代を隔ててS共同体を見れば、冒頭に見たような若干の物理的変化を除いてさほどの動きがなかったかのようである[16)]。全員が以前と同様の家に住み、同様の民族衣装をつけ、少なくとも村内では同様の活動に従事している。もともと強烈な共同体性に特徴づけられたこの社会で、その共同体性と共同体感情はむしろ強まった。人々の移動が激しくなり、グローバルな文化を知り、一部では巨額の収入を確保し、儀礼や祭礼の頻度や濃密さが減少しても、共同体という社会的実体は強固に確認され再確認されている。その一方で、「想像された共同体」に対する感情（Anderson 1983）は依然として希薄である。

ここでは文化のダイナミクスが見えにくいというダイナミクスに注目する必要がある。

注

1）平成９年度～平成11年度　文部省科学研究費補助金（国際学術研究）　課題番号09041019　「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究（Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim)」 研究代表者　小泉潤二。

2）調査結果の一部を Koizumi（1981)で報告した。

3）すぐに思い浮かぶのは、ロバート・レッドフィールド（Redfield 1930)、オスカー・ルイス（Lewis 1960)、クラウディオ・ロムニッツ（Lomnitz 1982）らが今世紀前半以来調査してきたメキシコのテポストラン、ソル・タックス（Tax 1953）とヒンショー（Hinshaw 1975）が20年以上を隔てて研究したグアテマラ中西部のパナハチェル、ワーグレー（Wagley 1941, 1949）とワタナベ（Watanabe 1992）が半世紀にわたって訪れているグアテマラ北西部のチマルテナンゴなどである。

4）ここで言う「還元論（reductionism)」については、Koizumi（1997)で論じた。

5）マム語を話す人々の数はおよそ70万人といわれている。マムについては簡単に解説したことがある（小泉 1993)。

6）この衣装の意味については別稿で扱った（小泉1996)。

7）和平合意については、Byrne（1996)などを参照。

8）経済企画庁の資料（SEGEPLAN 1998）でその一端を知ることができる。

9）「境界を分析する」（小泉1994）を参照。

10）"Toledo： Guatemala no malfirmará un acuerdo." *Siglo Veintiuno*, 26 de agosto, 1998, p. 55.

11）グアテマラのプロテスタンティズムについては、Burnett（1989）ほか。

12）1997年の数字である。

13）"Atrás del café." *Prensa Libre*, 24 de agosto de 1998, p. 18.

14）Mercado de Artesanías.

15）Museo Nacional de Arqueología y etnología.

16）一方、オリビア・カレッシアが近隣の共同体トドス・サントスについて作成した２本のビデオ（Carrescia 1982, 1989）は、動乱のために共同体が変容したことを過度なまでに強調している例である。

引用文献

小泉潤二

1987　「儀礼と還元論 ── 中米の事例と機能主義」『現代の社会人類学 2 儀礼と交換の行為』東京大学出版会　pp. 57-84.

――――,

1990　「マムの病いと災い ── グアテマラの事例と文化分析についての覚書」『民族文化の世界』上　小学館　pp. 404-425.

――――,

1993　「マム」『世界の民 ── 光と影』下　明石書店　pp. 167-175.

――――,

1994　「境界を分析する ── グアテマラの場合」『民族の出会うかたち』朝日新聞社　pp. 61-82.

――――,

1996　「現代マヤの衣装と政治 ── グアテマラの場合」『人間科学部紀要』（大阪大学）22巻

pp. 319–340.

Anderson, Benedict

1983 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso.

Burnett, Virginia Garrard

1989 "Protestantism in Rural Guatemala, 1872–1954." *Latin American Research Review* 24(2): 127–142.

Byrne, Hugh

1996 "The Guatemala Peace Accords: Assessment and Implications for the Future." *WOLA Brief*, December 1996.

Carrescia, Olivia

1982 *Todos Santos Cuchumatan: Report from a Guatemalan Village*. New York: First Run/Icarus Films.

———,

1989 *Todos Santos: The Survivors*. New York: First Run/Icarus Films.

DeWalt, Billie R.

1986 "Economic Assistance in Central America: Development or Impoverishment?" *Cultural Survival Quarterly* 10(1): 14–18.

Geertz, Clifford

1973 "Ritual and Social Change: A Javanese Example." In *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*. Basic Books, Inc., pp. 142–169.

Hinshaw, Robert E.

1975 *Panajachel: A Guatemalan Town in Thirty-Year Perspective*. University of Pittsburgh Press.

Koizumi, Junji

1981 *Symbol and Context: A Study of Self and Action in a Guatemalan Culture*. Ph. D. dissertation, Stanford University.

———,

1997 "Against Reductionism: Or How to Read the Civil-Religious Hierarchy of Middle America." Paper prepared for 'The Past and Future of Social Science Seminar' at the School of Social Science, The Institute for Advanced Study, Princeton, May 14, 1997.

Lewis, Oscar

1960 *Tepoztlan, Village in Mexico*. Holt.

Lomnitz-Adler, Claudio

1982 *Evolución de una sociedad rural*. México: Fondo de Cultura Económica.

Redfield, Robert

1930 *Tepoztlan, a Mexican Village: A Study of Folk Life*. University of Chicago Press.

SEGEPLAN (Secretaria de Planificación y Programación)

1998 Información General de Proyectos, Sistema Nacional de Información y Seguimiento de Proyectos. Guatemala.

Tax, Sol

1953 *Penny Capitalism: A Guatemalan Indian Economy*. Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology, Pub. No. 16.

Wagley, Charles

1941 *Economics of a Guatemalan Village*. Memoir Series of the American Anthropological Association, No. 58.

———,

1949 *Social and Religious Life of a Guatemalan Village*. Memoir Series of the American Anthropological Association, No. 71.

Warren, Kay B.

1998 *Indigenous Movements and Their Critics: Pan-Maya Activism in Guatemala*. Princeton University Press.

Watanabe, John M.

1992 *Maya Saints and Souls in a Changing World*. University of Texas Press.

Wolf, Eric R.

1957 "Closed Corporate Peasant Communities in Mesoamerica and Central Java." *Southwestern Journal of Anthropology* 13: 1-18.

Dynamics of Cultures and Systems in North–western Guatemala

Junji KOIZUMI

This is an interim report on an ongoing anthropological research in Central America. The research is part of a joint project titled "Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim," which is supported by the Grant in Aid for Scientific Research of the Japanese Ministry of Education, Science, and Culture.

In the late 1970s, the author conducted long–term ethnographic research in the Department of Huehuetenango of north–western Guatemala; he is now collecting field data on the changes that have occurred there in the past two decades. The purpose of this re–study is not to address specific cultural changes *per se*, but to understand such changes in relation to dynamics of larger systems. Here the term "system" is used purposefully ambiguous and polysemous in order to cover diverse social, economic and political systems. The "system" roughly refers to causal–functional integration, and the "culture" to logico–meaningful integration.

The research focuses on the dynamism in a community west of Huehuetenango City. The following systemic factors are examined:

1. The impact of the political violence in the 1980s and the consequences of the Peace Accords in 1996.
2. Development of the system of education, particularly of the bilingual educational system.
3. The impact of foreign aids, particularly after the Peace Accords.
4. Change in the market economy and the advance of the free trade.
5. New pattern of land acquisition and production of coffee for export.
6. The influence of the world religious systems and the changes in the so–called civil–religious hierarchy.
7. Changing pattern of labor in coffee plantations and labor immigration to the United States, which can be seen as a capital investment and an entrepreneurial activity.
8. Development of tourism which puts Mayan ethnicity in the commercial context.

Despite these changes on the systemic level, the culture appears to be unchanging at least on the surface and maintains a strong orientation toward community. It is argued that this seeming absence of cultural dynamism should be understood in relation to significant changes in larger systems.